

13 遠
57



遠門
475
卷

神の代々の陰陽和合の道と射合の時生と 晒落天竺の菩薩提薩埋以菩薩と
略も浮屠氏の晒落唐國の莊周も言むと知ると寓言者して多きを 嘯也
世の渡り時代僕も江戸の生と友にそめさるゝ人か馬鹿ふあら
と云ふ 頼智京傳 柳亭馬琴妙ある作は多けれど書て雪磨や三馬
か述と作意のまのの酔作か明さぬ夜半もなり 晒落がことじと
謔言は射合する 梅の木に彫つけく一まつ待たり版木み彫るの
末とてさるるに 梅とも兼知挽之の物狂ひ志多し 是も矢張木遣とや
と申もさるるに梅と兼み高くつらうの鼻をかり木の葉天狗の爪の先
よの半張びひ門かくもの

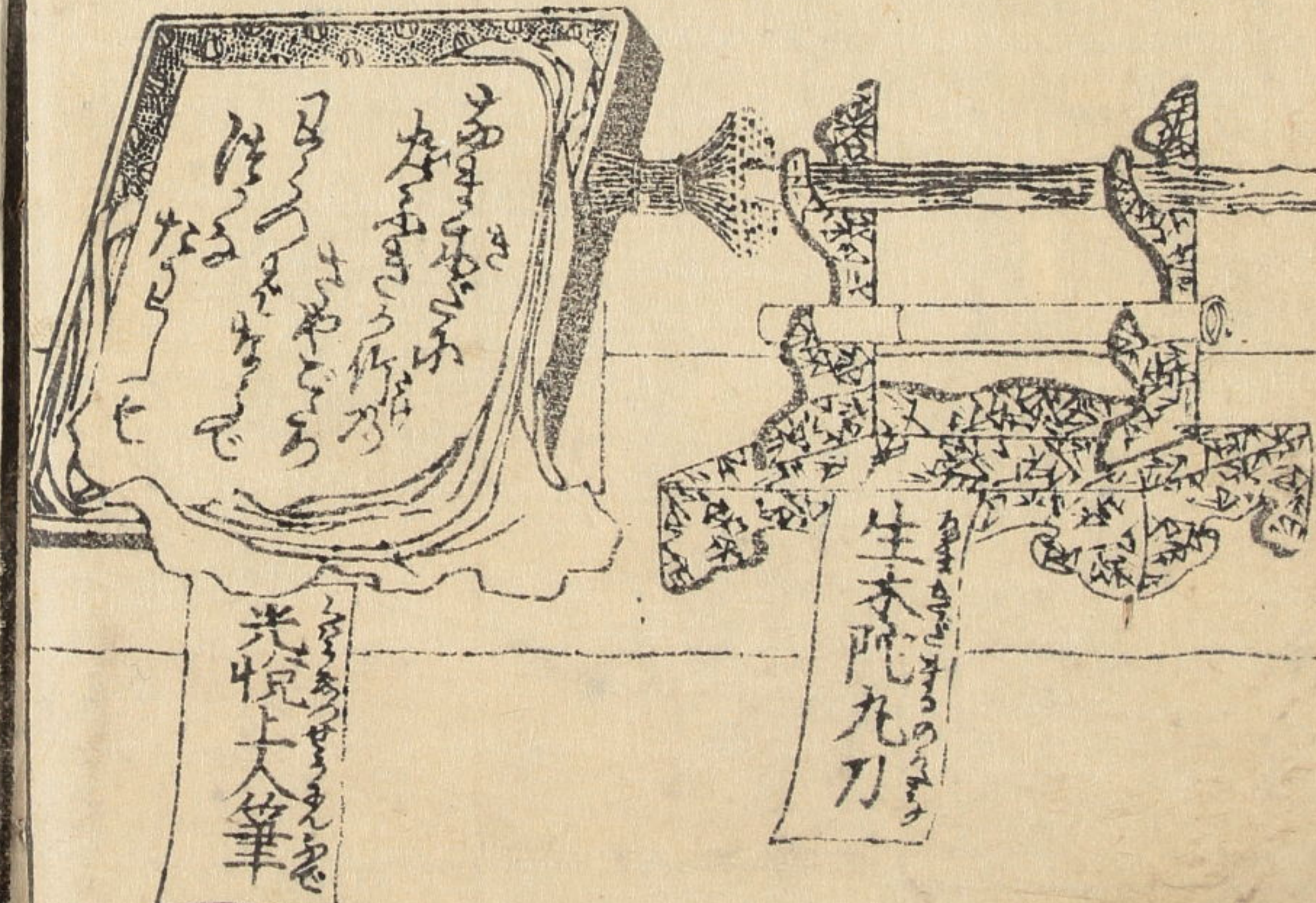
作者の真似とく人の目
くらまさんとして

林至の止藏坊



此の書は... 海内... 下... 則... 光... 一...

此の書は... 海内... 下... 則... 光... 一...

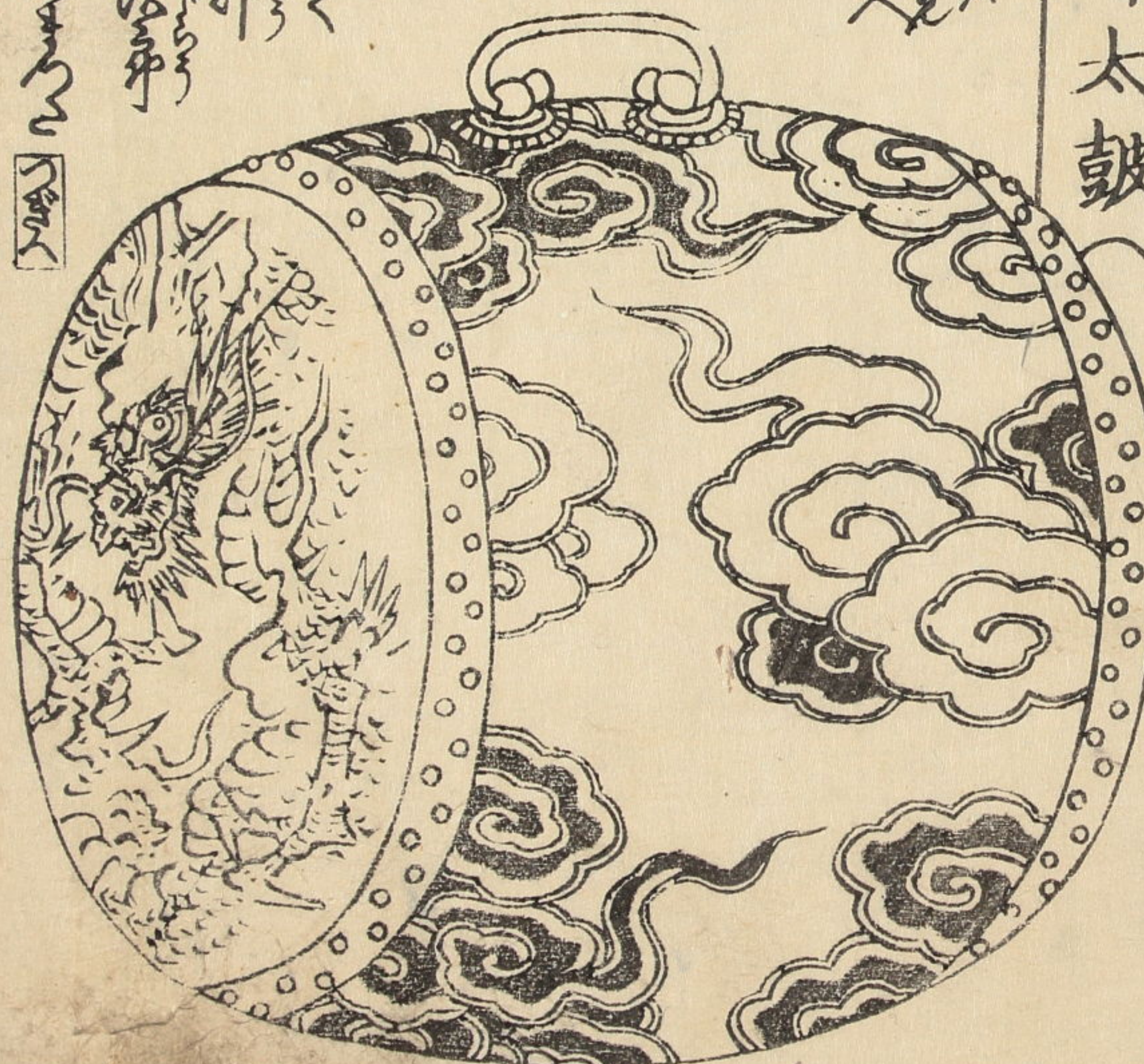


光悦上人筆

生本院九刀

里見義實の陣太鼓

此の太鼓... 里見義實... 侍女...



里見

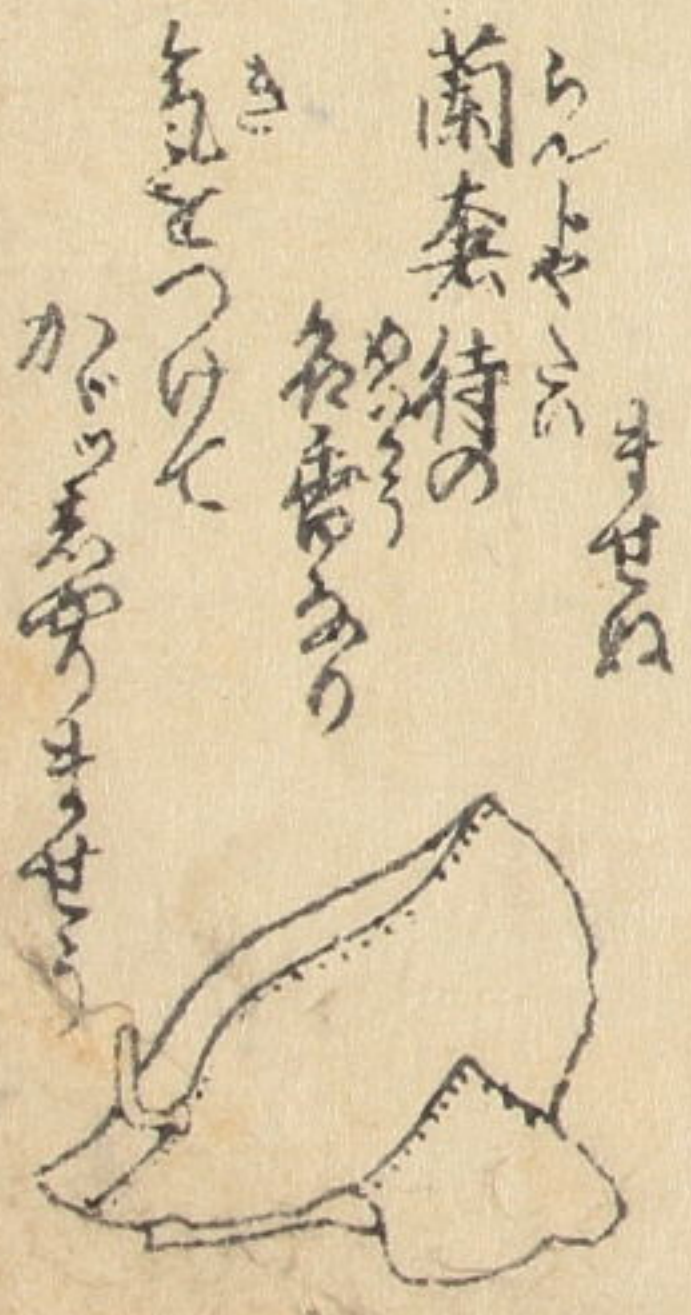
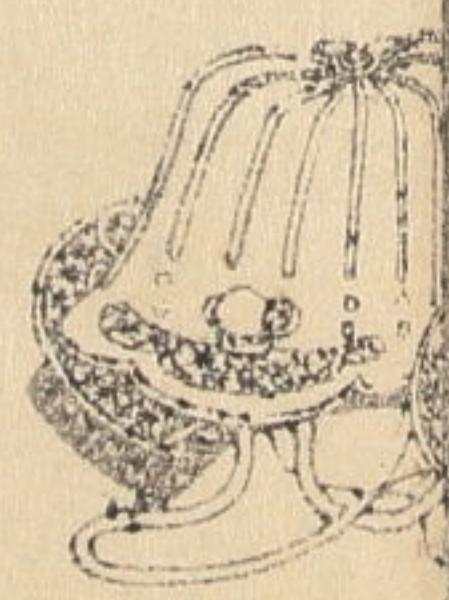
新正治元年正月十三日小
 二十才也薨ト入源の頼朝公の由、
 其の人の朝二重のふくさ
 どのりねがみ多く、
 の男がゆり、
 朝さぬのか、
 朝二重のふくさ

頼朝公十二才の時のかうぐわりの
 頼朝公十二才の時のかうぐわりの

一節 赤穂忠臣經

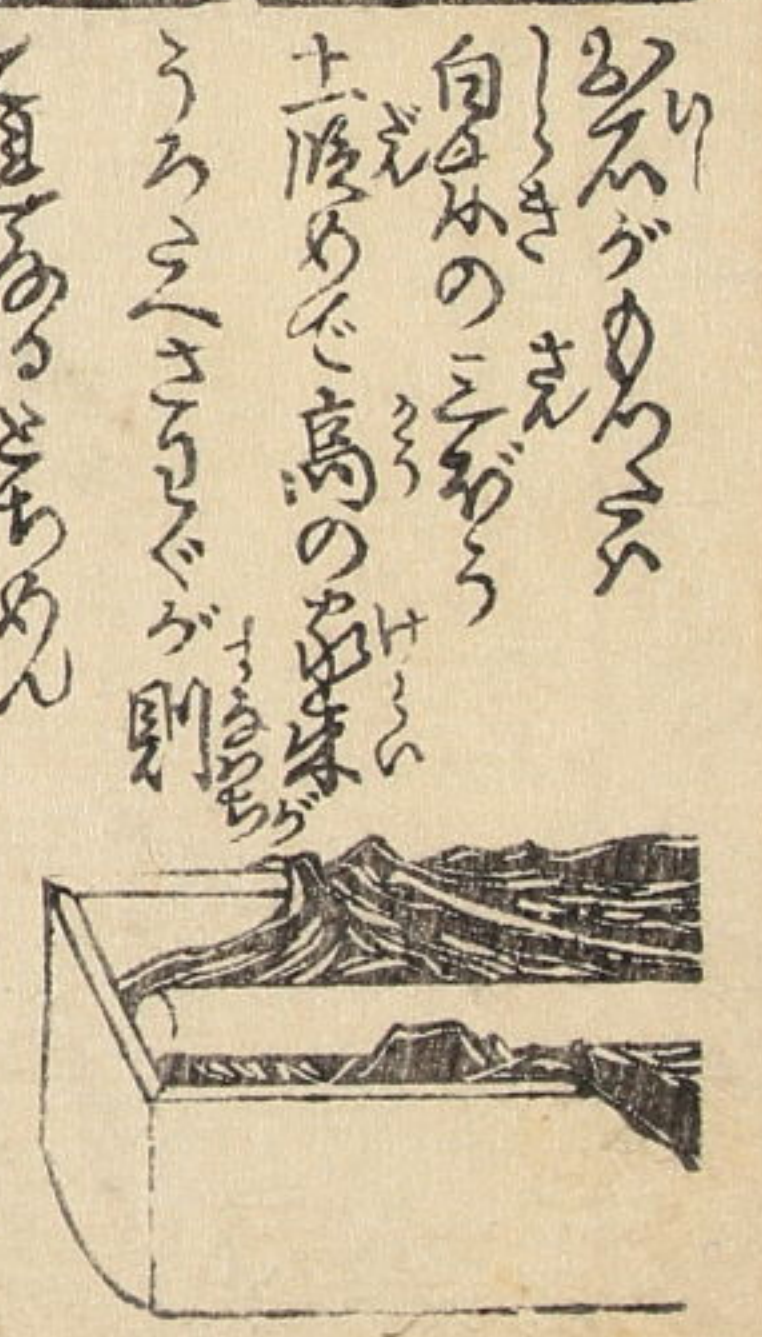
大序 鶴岡將軍社 泰鹽谷
 御臺 兎見分師直 惠羅惚
 桃井口 論鹽谷 挨拶段切
 第二段 目力弥使者小浪
 戀慕 桃井立腹本藏松切
 而加計出壽

仁田義貞の



無返答切腹両士死體見
 而怖少不念勘平本望血
 判両士財布懐中五十兩
 第七段目力弥使者御臺
 書狀大星内見鈎燈籠而
 讀憎於輕茂二階加羅讀
 憎九太夫茂椽之下而讀

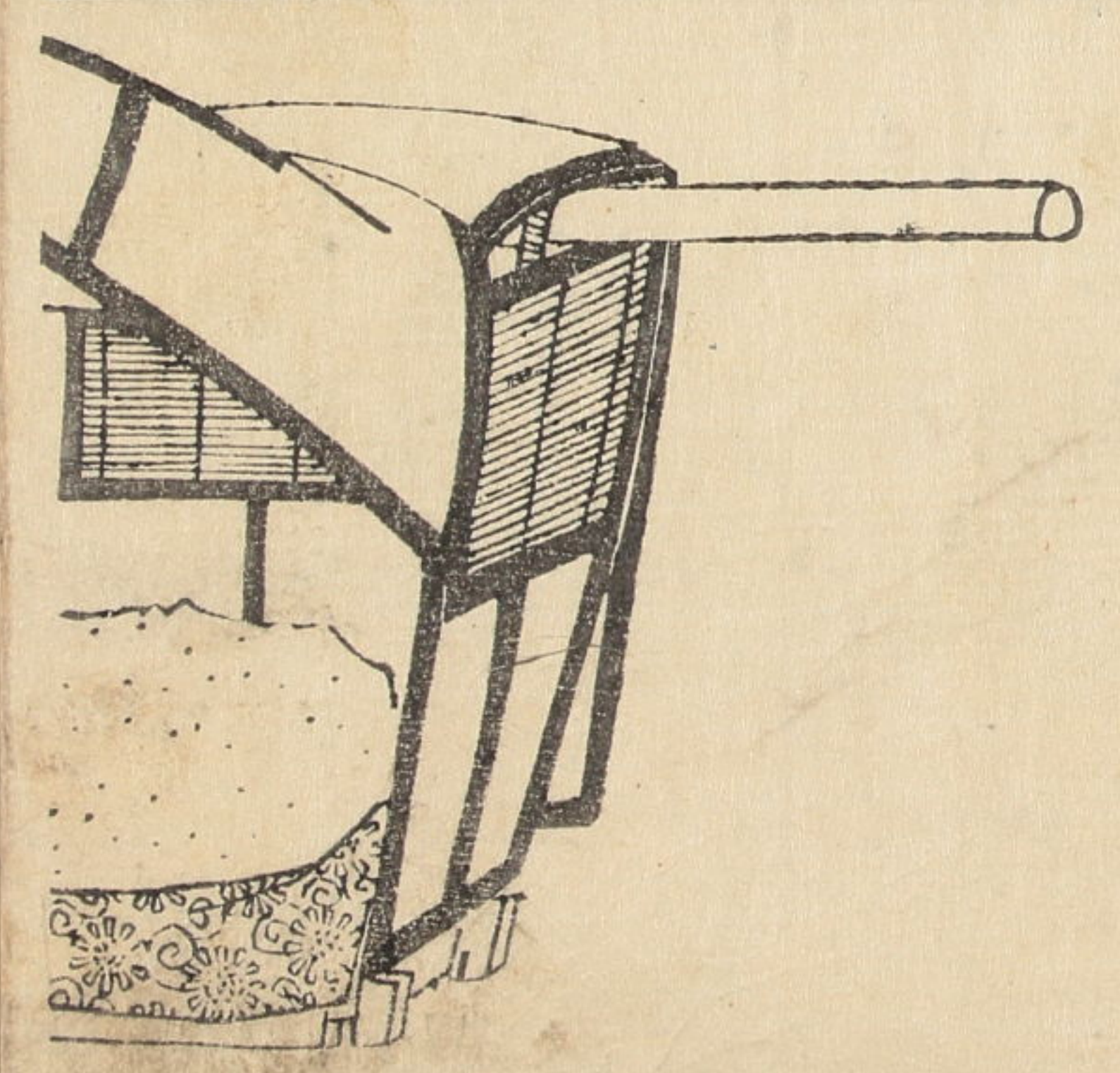
憎三人乍何賀書而有多
 作者計知難多
 第八段目道行旅路之嫁
 入大名之行列見而曾奈
 多之嫁入茂阿野様仁仕
 度登和五百石之倍臣仁
 和少虫賀與井



土盛りを高の
 うろくさくさくが別
 とまあるさあめん
 がうあつ

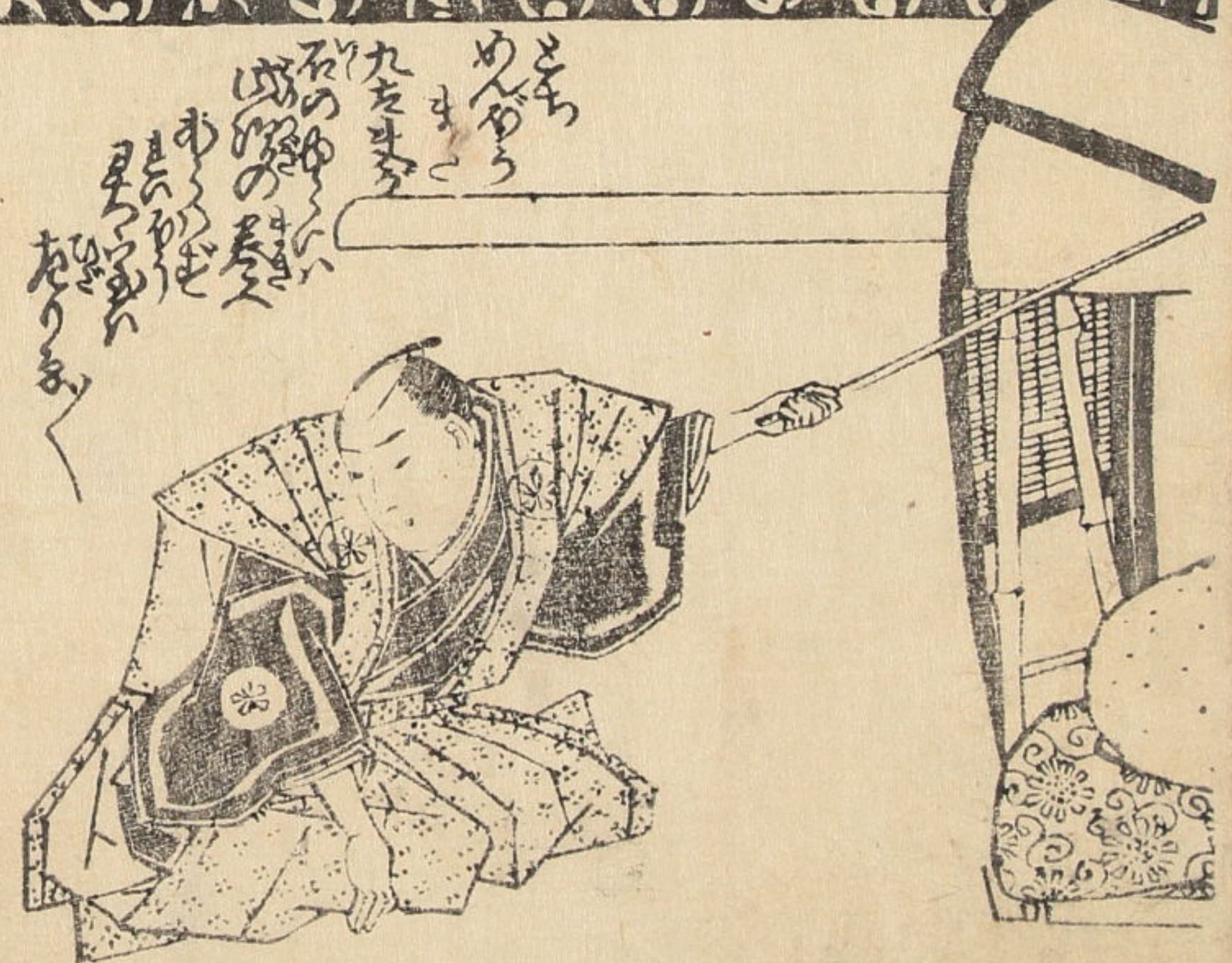


内なる
 手を叩て
 此の
 及ぶぬ
 及ぶぬ
 及ぶぬ



及ぶぬ
 及ぶぬ
 及ぶぬ
 及ぶぬ
 及ぶぬ

第九段目親子賀長之旅
 無事而着於林賀取次娘
 賀座仁看嫁入賀伊茶附
 表之虚無僧賀胸惡力弥
 賀鎗而突障子賀場多附



九代室化天皇の御宇に於ては
 賀座仁看嫁入賀伊茶附
 賀鎗而突障子賀場多附

第十段目義平旌疑捕人
 仁略而荷物之長持捕多
 捕多登近所江聞江而大
 木奈仕合近所仁知多羅
 敵討和出来間井
 第十一段目夜討之銘々
 搦矢而門打時打夜巡取

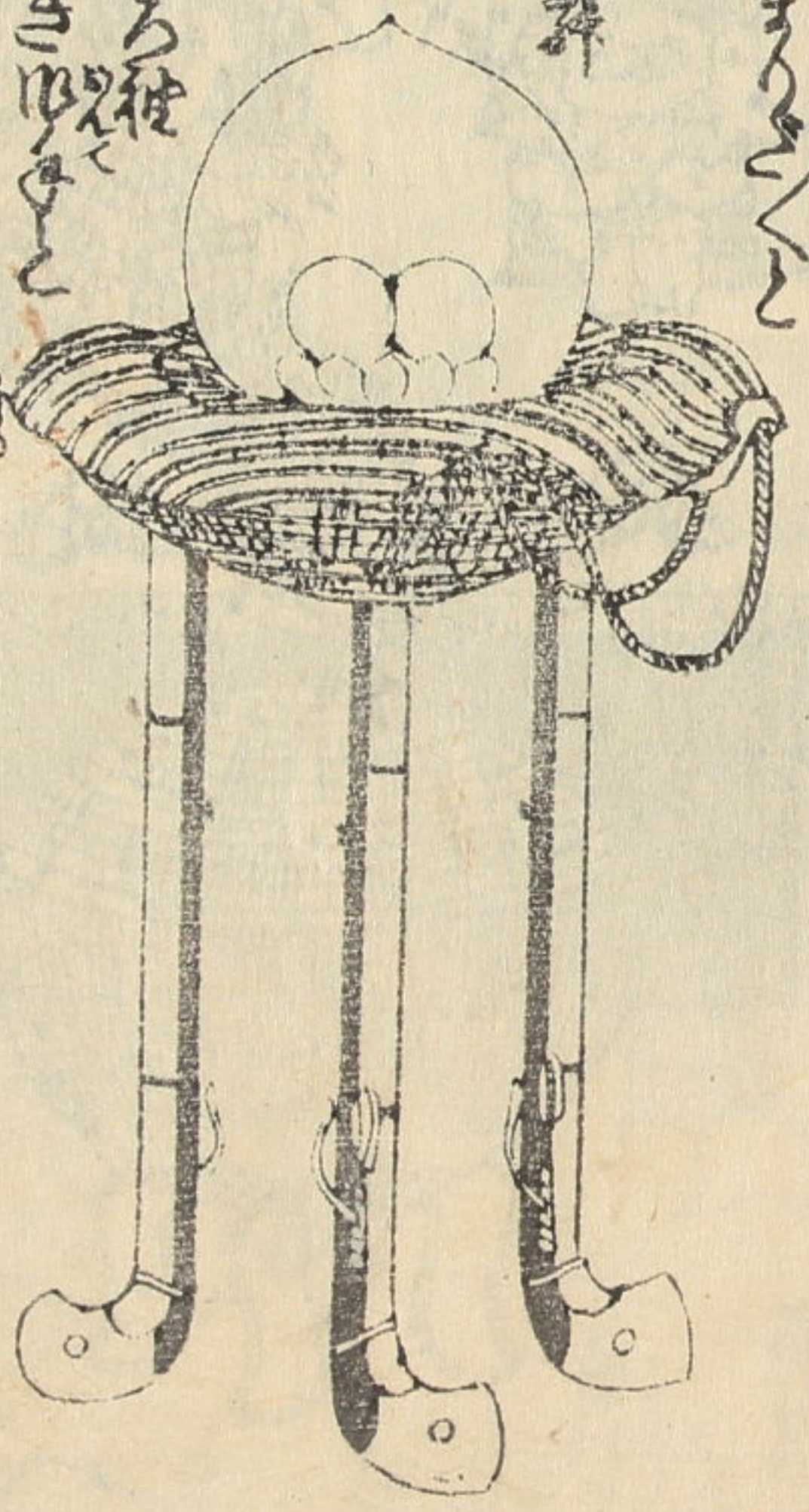
是るるかどのうちの子は人
 九代室化天皇の御宇に於ては
 賀座仁看嫁入賀伊茶附
 賀鎗而突障子賀場多附
 仁略而荷物之長持捕多
 捕多登近所江聞江而大
 木奈仕合近所仁知多羅
 敵討和出来間井
 第十一段目夜討之銘々
 搦矢而門打時打夜巡取

得而繩打歎賀隱而皆々
 氣尾打矢間賀見附而塔
 堂首打悅淚之波打皆々
 手尾打登手加羅頓々果
 大鼓打一説赤穂忠臣經
 是が本乃
 南具佐弥陀南具佐弥陀

林至止藏作
 林内とぞり
 林内とぞり
 林内とぞり

夜光乃ニツ玉

夜光乃ニツ玉
 夜光乃ニツ玉
 夜光乃ニツ玉



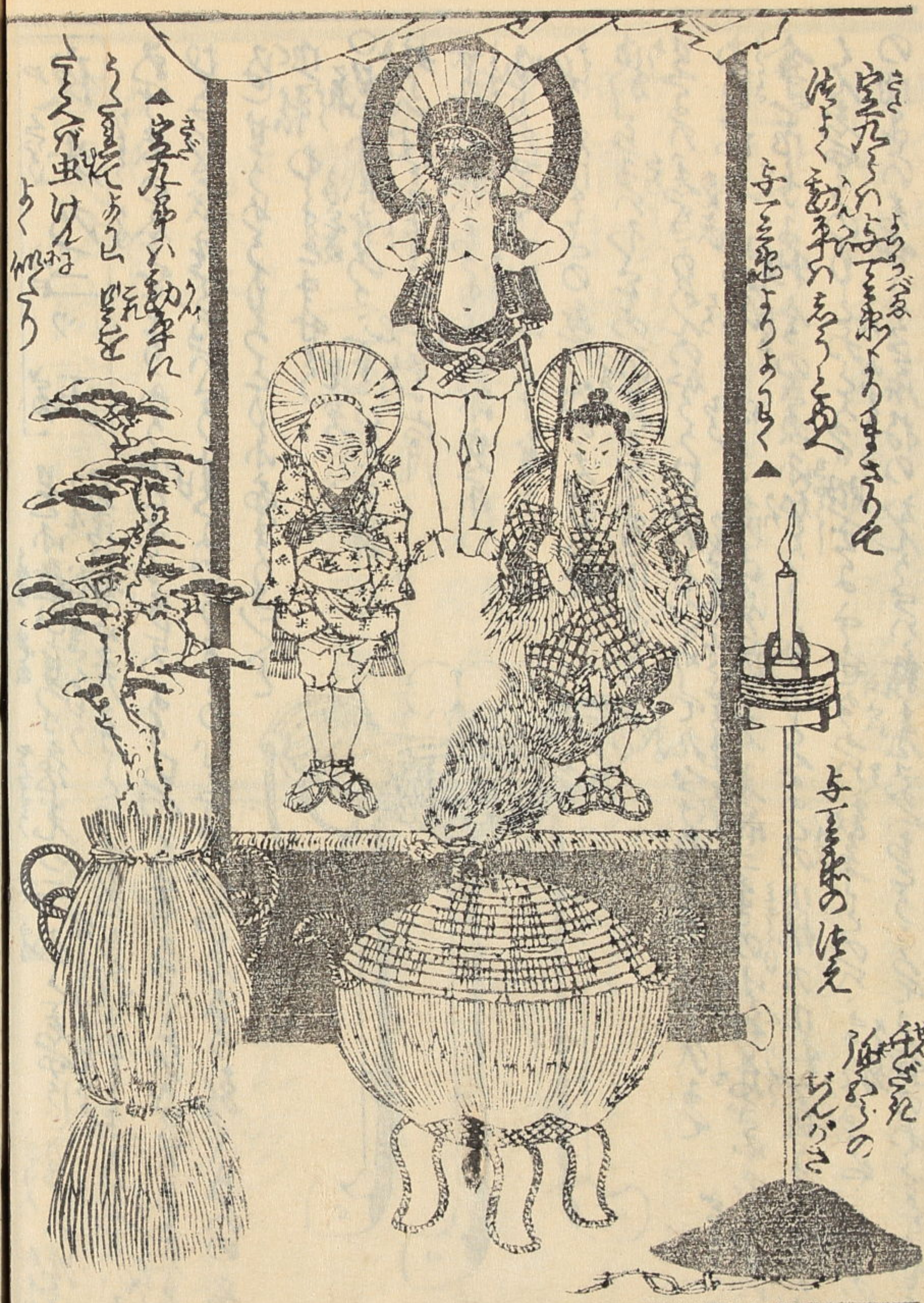
夜光乃ニツ玉
 夜光乃ニツ玉
 夜光乃ニツ玉

此の世に幾ひも生るる梅やとては
 徳美金の被布不さつのは地
 けりんあやうとて
 志くつねに
 後地あめ
 天のの
 佛法とあつて
 志やうと
 此の世の
 ありて
 平あ
 中世の



〓

納所の
 海外の
 市江
 白旗の
 心
 せう



〓
 〓
 〓

〓
 〓

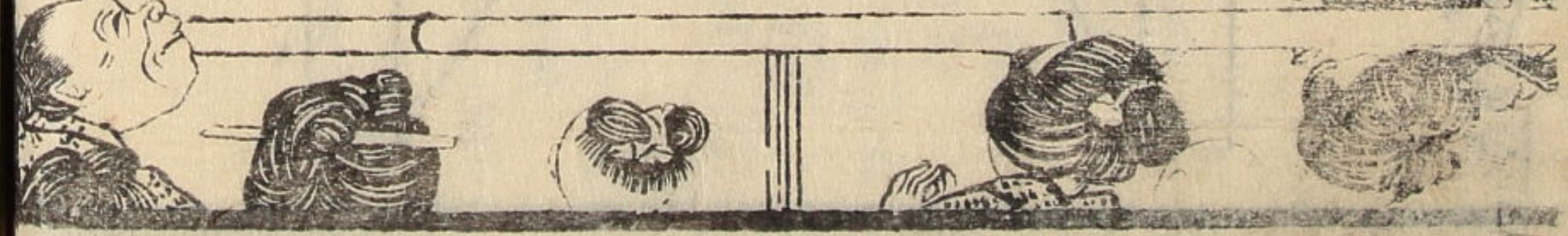
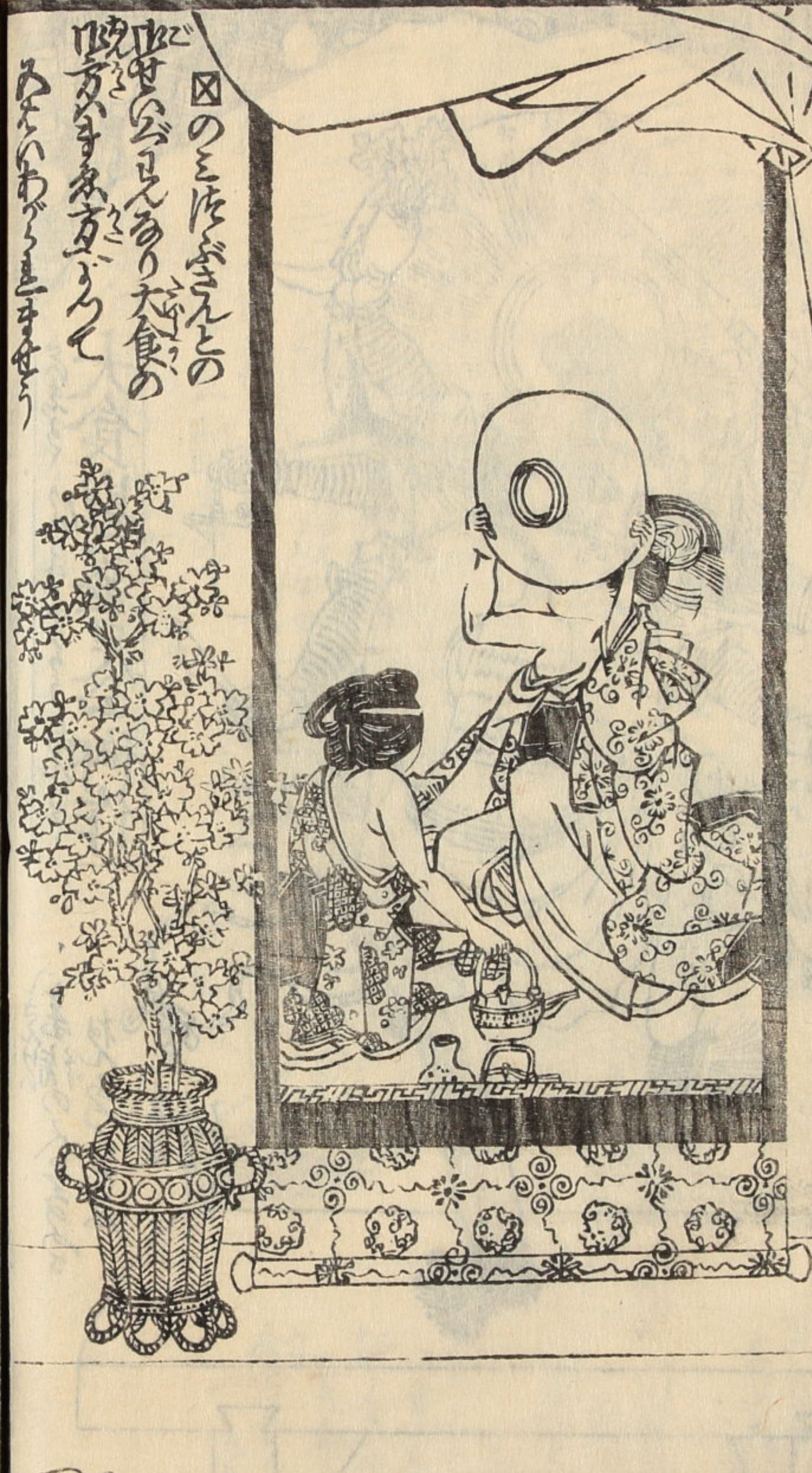
〓
 〓

美酒勢天のすなわち代仏あり或とき長村長野の長酒は
とあつしわいのりち程ふち紫りて宇頂天は昇り多ひ多くの酒を
は信妙極のいひよけちけち横は麻新迦とありまよ
こまを怒りて捲よ戸の多利屋の大臣酔ぶきの御をけせ
臨の池へおこまがえよりまよまよ本像るれがあんとも
りぐのけちるまよくまよくとも水川へまよまよ出で沈田仔丹の淵
と戒唐去へまよまよ作まよに殺美湯まよまよまよ香欣李白ま
まよまよ詩百編の念仏紙まよまよまよまよ酒代の眞加法を
取まよまよ後宋の代まよまよ東大寺の泥田坊まよまよまよまよ
れへ水連中へまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
系那の酒の里に住まよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよ中まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

○酒宴如来の脇士小まよまよの兩運寺金蓋の守本まよ分限
菩薩のまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
右のまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
式の帳面をまよまよ正念金二朱八片まよ小判一兩は換りまよまよ
銀一朱十六まよまよ金一兩にまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
のまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
佛と祈りてまよまよの合と祈ひまよまよの合を祈るまよまよ
信心のまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
福考とせんまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよ

○是るの酒宴如来の脇士小まよまよの兩運寺金蓋の守本まよ分限
菩薩のまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
右のまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
式の帳面をまよまよ正念金二朱八片まよ小判一兩は換りまよまよ
銀一朱十六まよまよ金一兩にまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
のまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
佛と祈りてまよまよの合と祈ひまよまよの合を祈るまよまよ
信心のまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
福考とせんまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよ

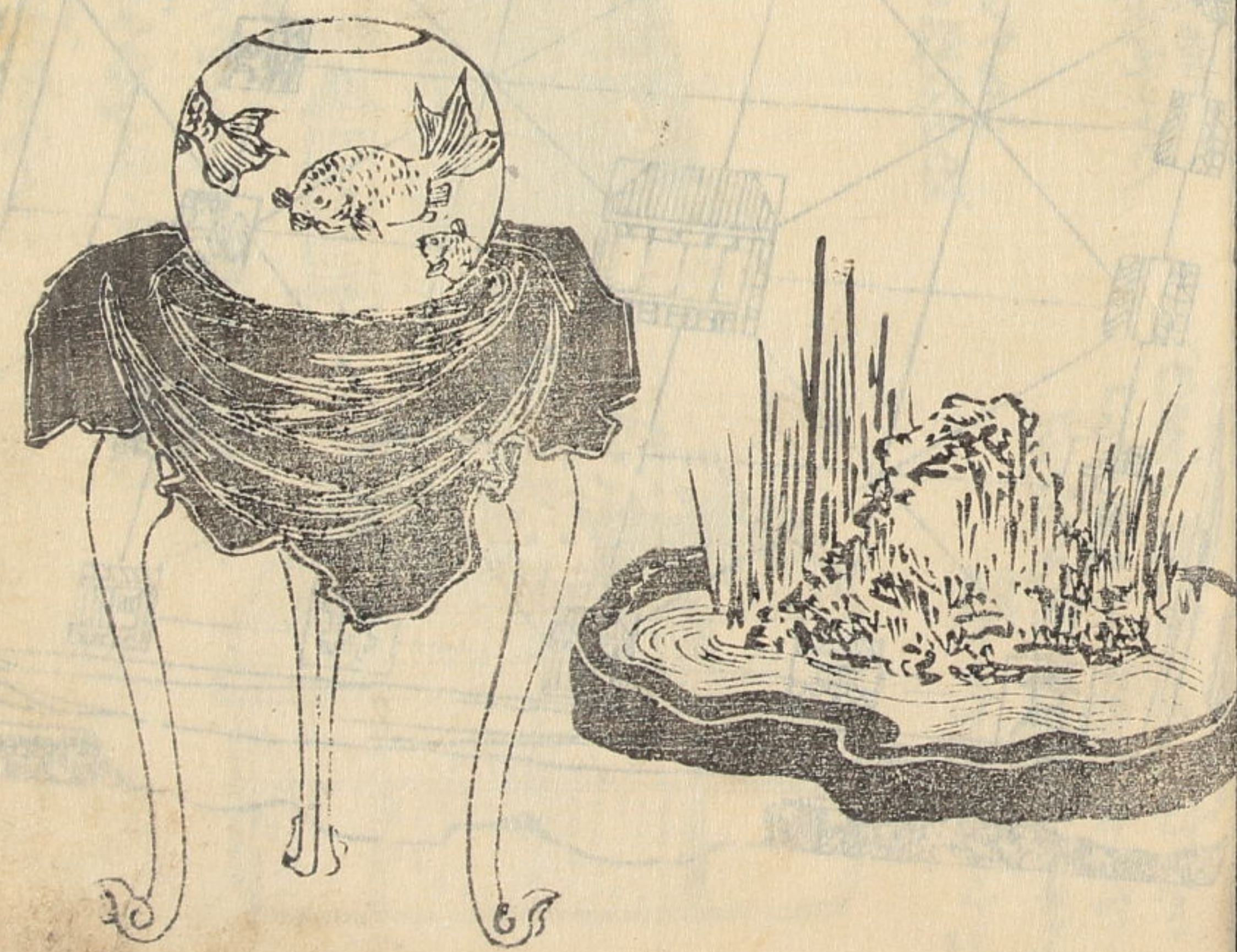
けきちろりゆてまら板の上にてせりゆ水之のまろこ
 本口はつりまるとのふきやうこのゆもまねついで舞の
 通にゆきゆお給はまびてゐるまもかたよあ
 也せん酒もまへんまも



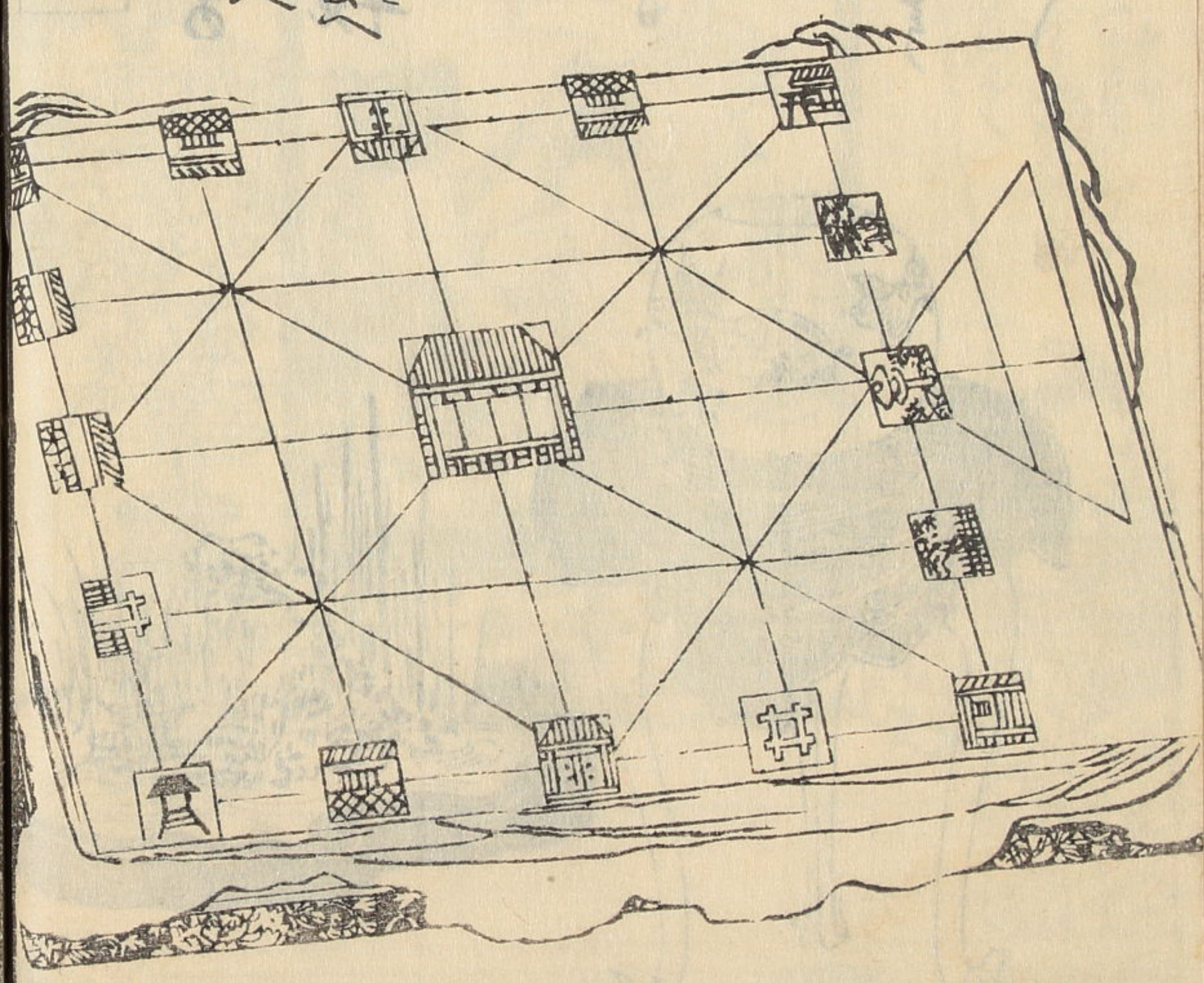
金魚不快之御王

正面小殿ひなりの入滝谷の
 重宝金魚不快の玉と
 八貝葉除の赤縁日ゆく
 のまのふ玉まきりけごらひ
 せらみまきりくふむうあひも
 あつねの石燈の玉とやまも
 あくそのくよつてらんちう

金魚不快の御王
 御王



ありこ小登ひまのふ
 加古川が流るる
 日か算の大星力海へ
 新の高のむき一の強果あり
 月廿に十六むき一のいふあふ
 四十七人の浪人を高きふゆて
 礼入してはの小登ひまのふ
 この強果の山徳なり



尾不妻置まのり太田一竹といふ数の中より
 出たあり一むとの貞子ゆ女の
 中よりおまこやまのり山徳の山徳なり

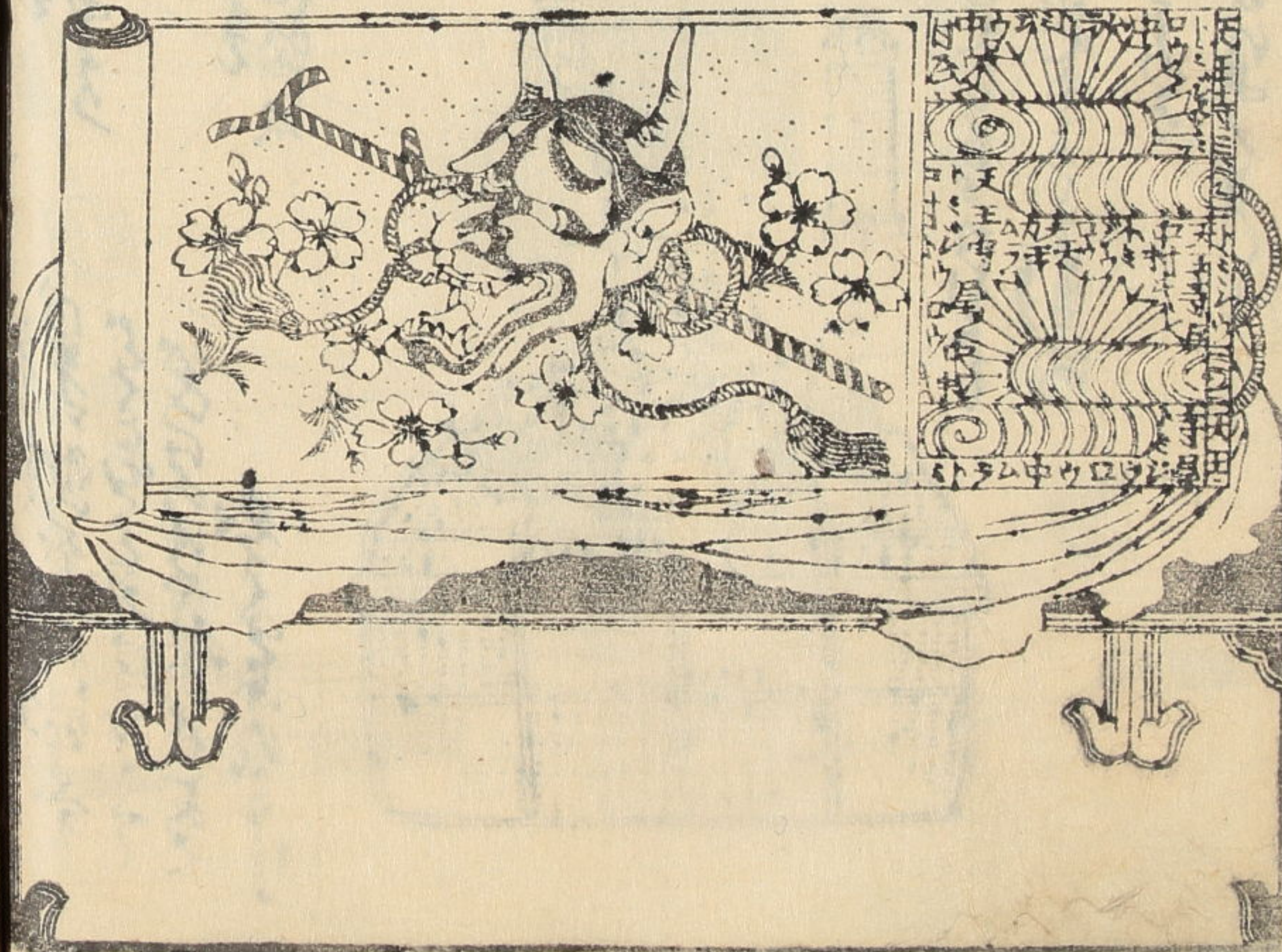
山徳の山徳なり
 山徳の山徳なり
 山徳の山徳なり



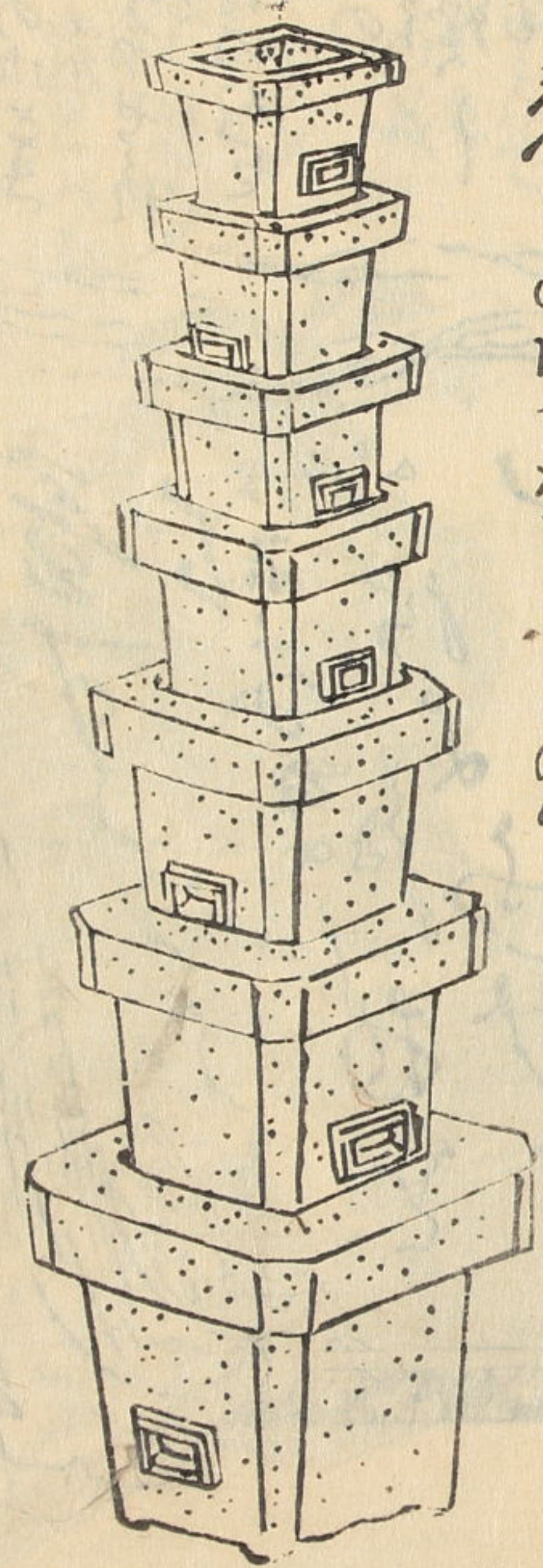
ありこ小登ひまのふ
 加古川が流るる
 日か算の大星力海へ
 新の高のむき一の強果あり
 月廿に十六むき一のいふあふ
 四十七人の浪人を高きふゆて
 礼入してはの小登ひまのふ
 この強果の山徳なり

大盤若面經一卷

此の巻は、
 上人五世の什宝堂六の二代目足跡
 和尙の所おしりて、
 宝物ありて、
 金ふらうしもの、
 びんごのなまゝあちち
 よろしくさうげん
 けすひまき



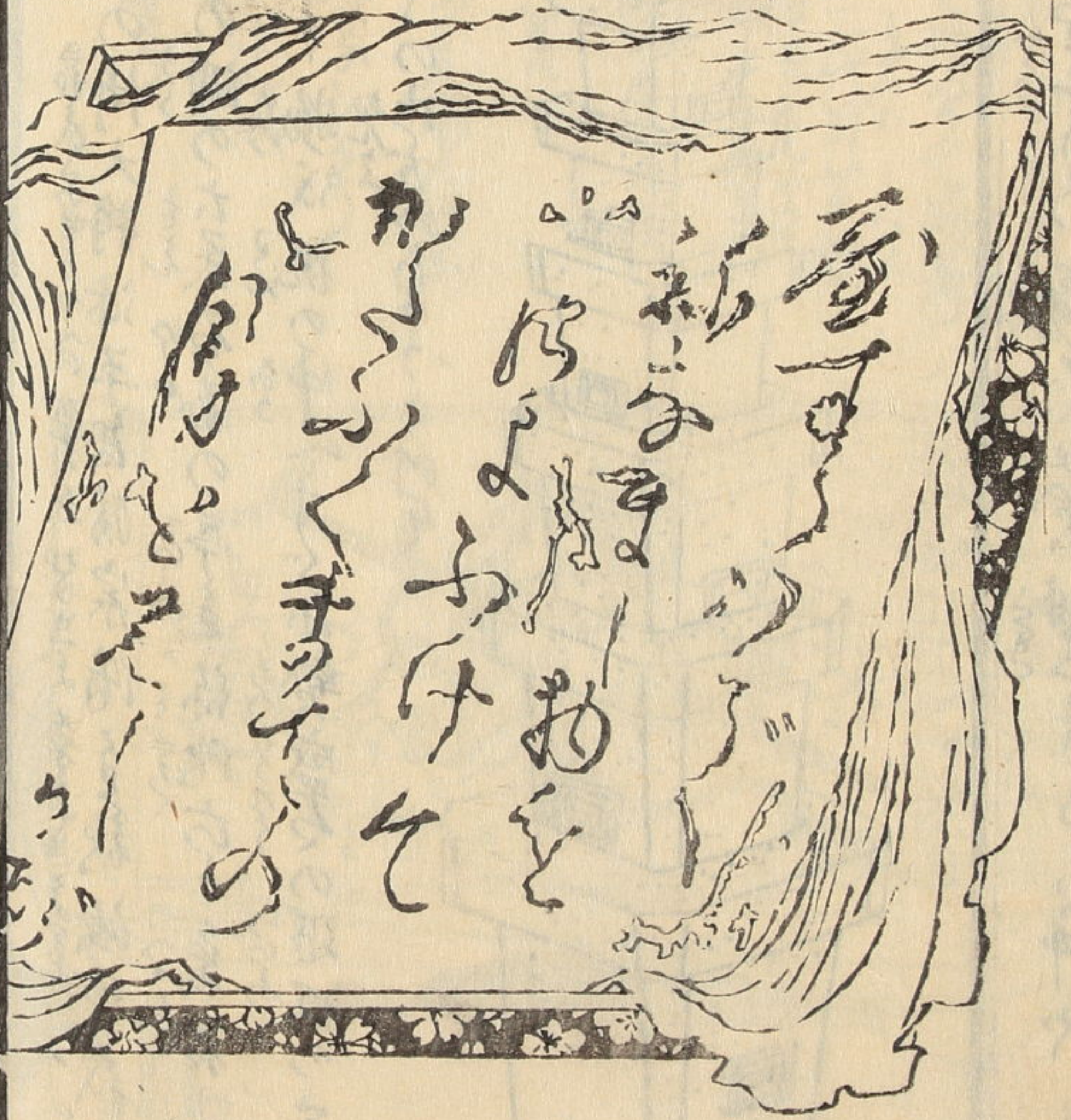
此の石塔婆は平泉の侍大将源平宗清の義経公の
 怒ると候は源平の浦の大民石塔の序に源平宗清の
 七輪の塔ありて、
 建一塔婆ありて、
 所がわが
 塔のりち
 かけりて



此の火風堂の瑞を焚焚す
 七輪の塔
 止藏法師

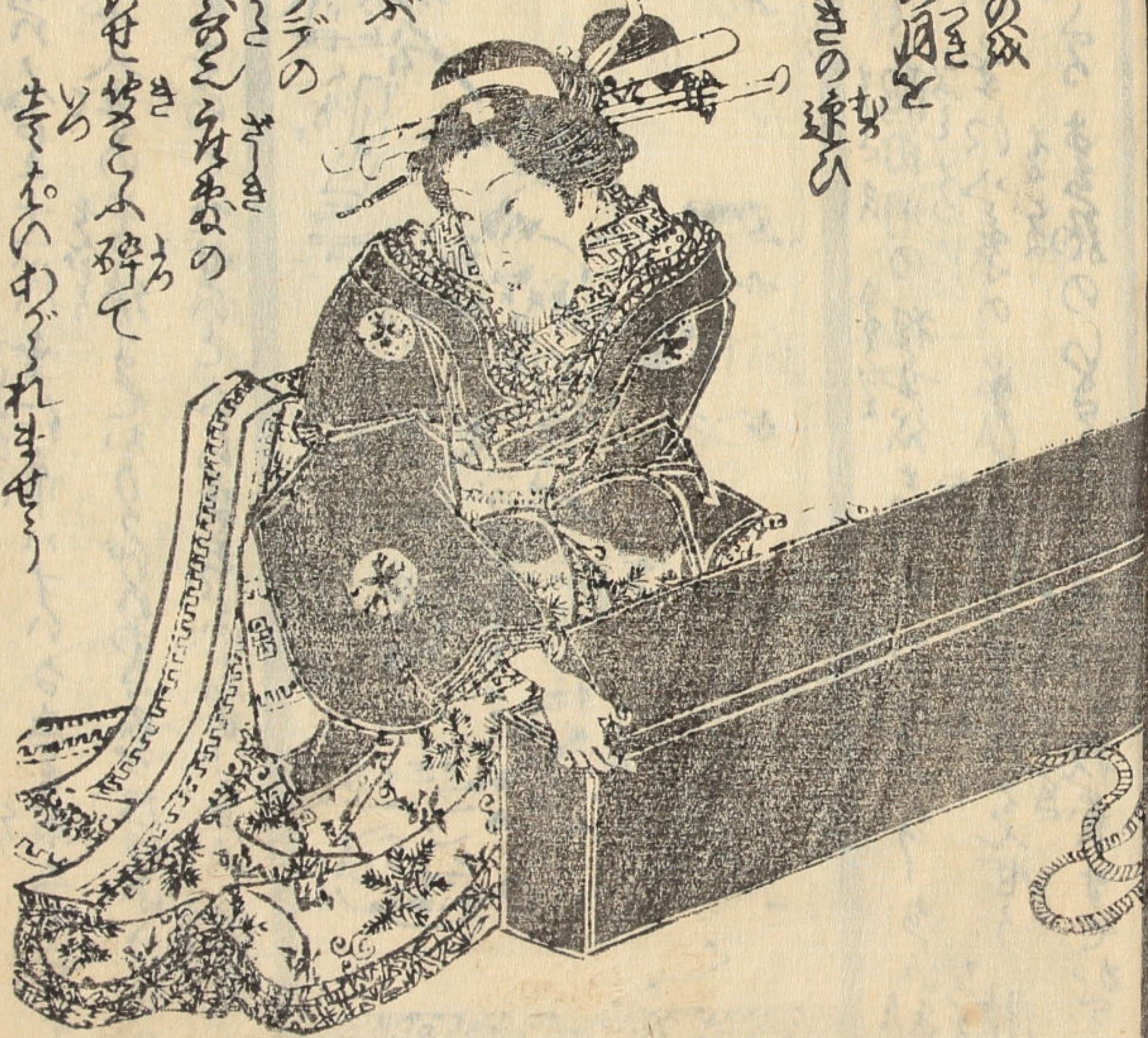
藝者衆之内歌の式紙

三味線の天智天皇
 花林堂達三の由緒
 唐来童子に命せられ
 長柄太政大臣のお世
 宗ては松権持の
 赤澤左衛門が續一
 中倉左衛門おん
 内のおの源氏たり
 香のどりむく上人披露
 おまはるゝとある

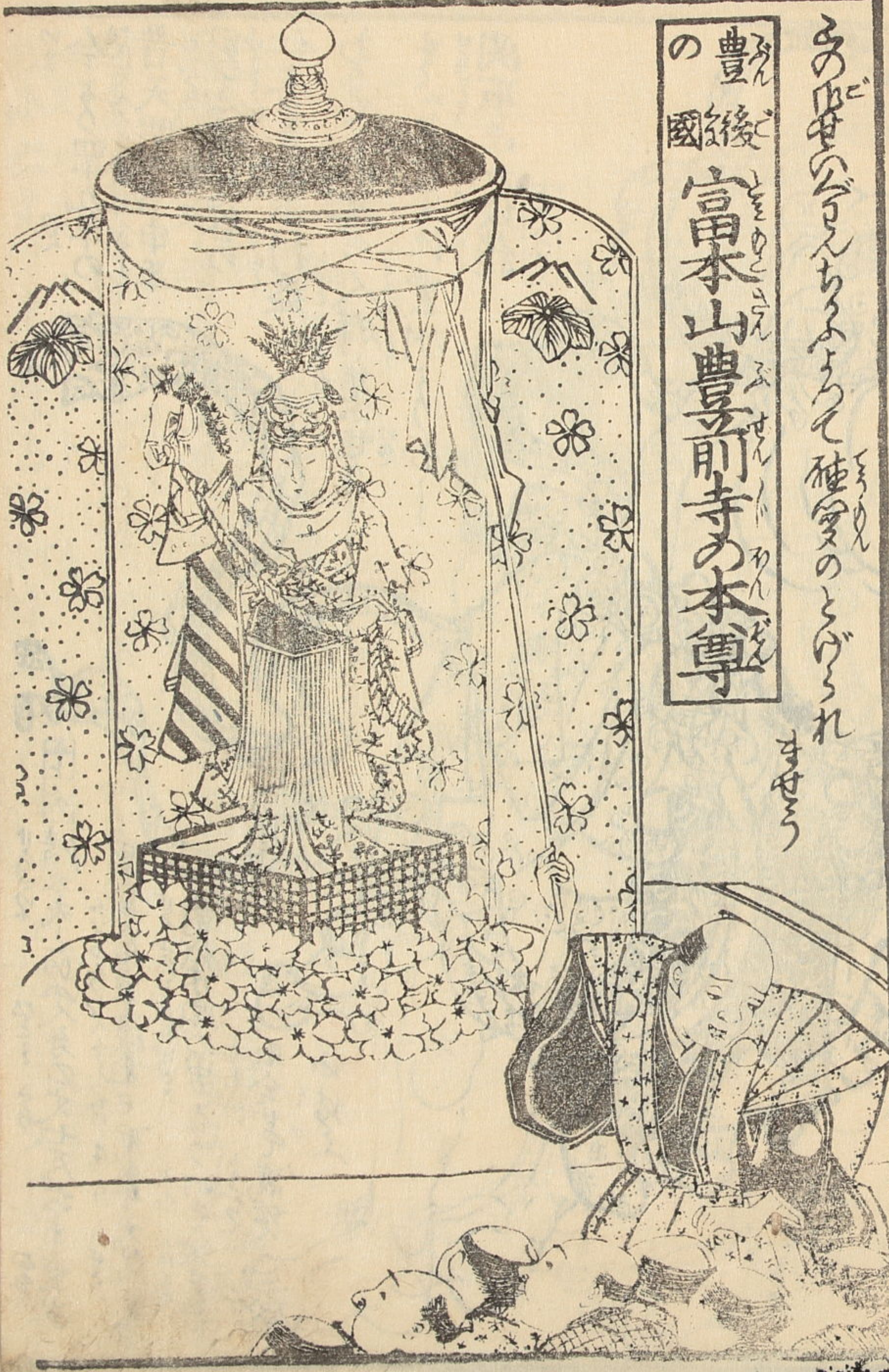


徳厚の... (Title of the illustration)

一由... (Text describing the scene or the person in the illustration)



... (Small text at the bottom left of the illustration)



豊後の富本山豊前寺の本尊

その由せのつらふとて種々のとびられ
たけらう

浦人松尾のおねひまの隅田川の程女が志づめり
 おのれ我妻にあまひをいふ葉のよひ大津のまき居をせう
 意のよととりかりするまき居のしんくつと老松の枝をまてかてせん



皇仁帝の御年... 皇仁帝の御年... 皇仁帝の御年...
 皇仁帝の御年... 皇仁帝の御年... 皇仁帝の御年...
 皇仁帝の御年... 皇仁帝の御年... 皇仁帝の御年...

今より四十九年の
 昔天明八戌申年
 同日文谷の
 仁王尊大利益
 ありて素詣の人群集せり
 まこと其年に雲州より出
 関取小九佐緒



上

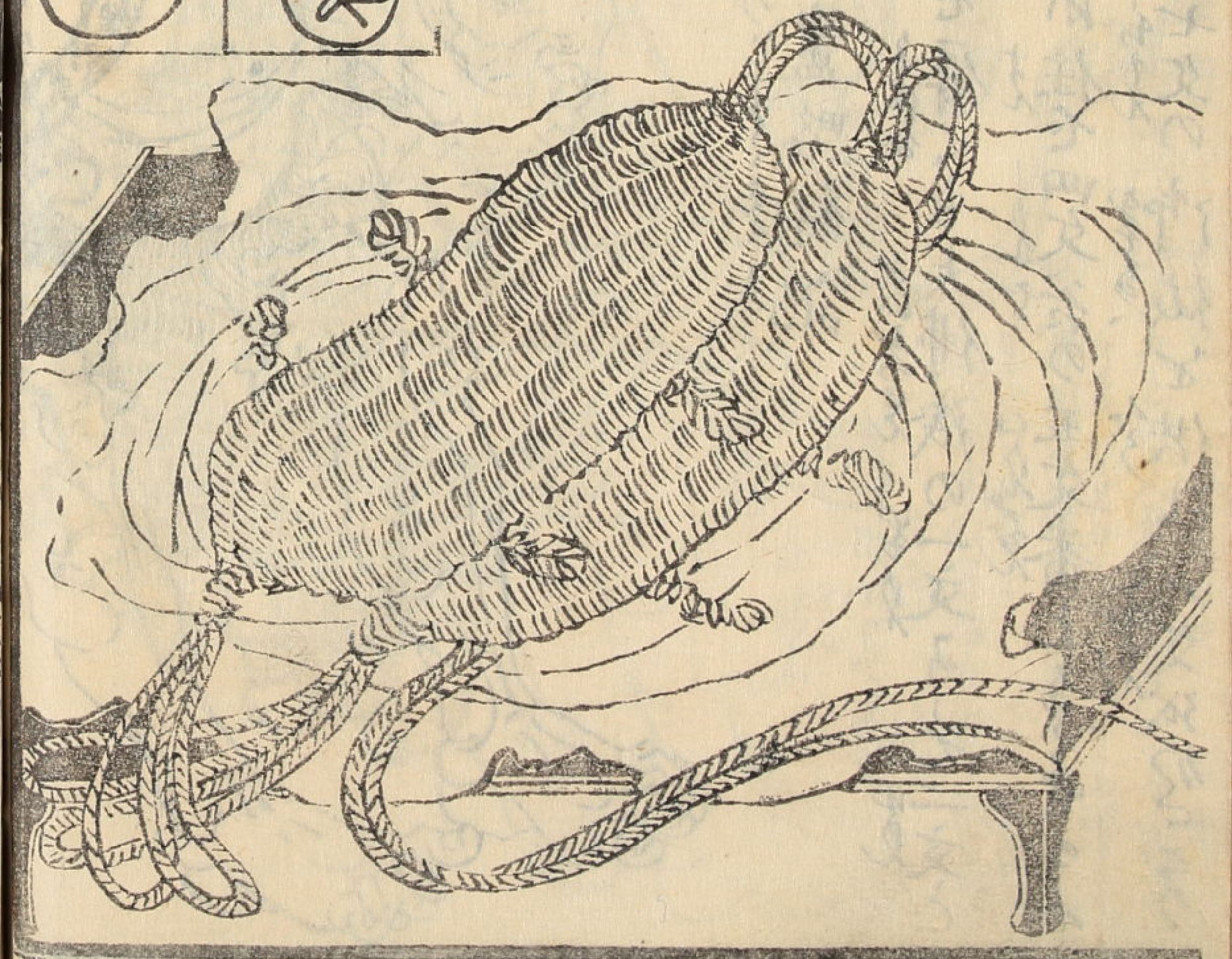
上
 清大夫との文七人
 四人を同宮に設け己酉年大関と
 前代未聞の男ありて彼を
 取合せ高境
 小徳

碑文谷仁王尊文畫略縁記

拵佛法守護の仁王尊との心を辱くも大佛淺の一文より二文と
 別と仁王と現トニ文の袂細小佳也四文谷の五文番とるる也
 故小六文の光岸ちと灯一七文の御儀を供ト八文紙かざり

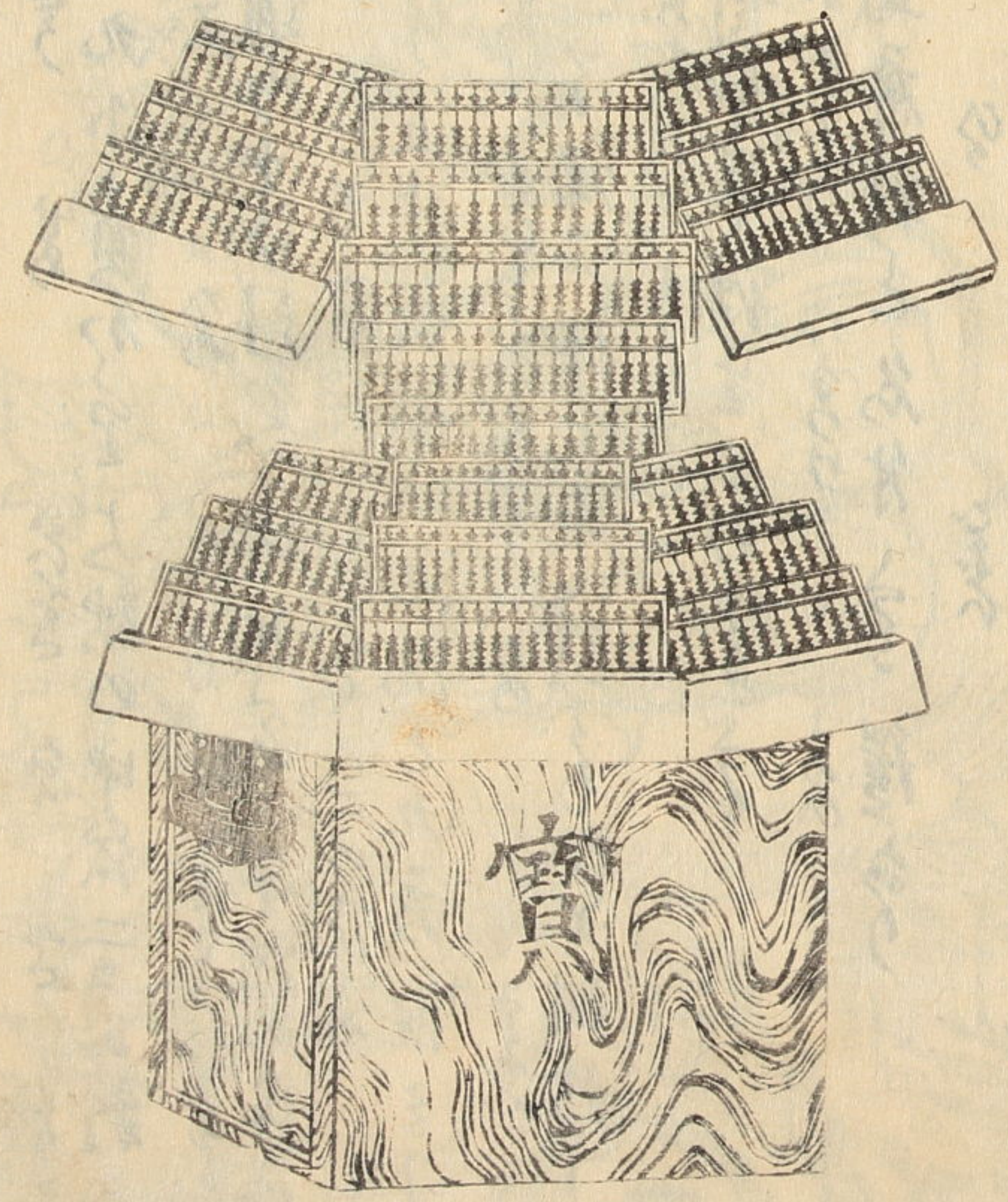
八日紙縁日とて九文紗がゆく裸
 あそはの三十文の巾着袋土文の鞋
 中も御足にあらはれたる巾着袋
 仍て七文の巾着袋を巾着とす
 實は袋小上て拜あはる
 中

林至止藏作
 五雲亭貞秀画



筆勘責之鑑

是るる 此鑑へ九を
 筆教拾方三手
 二百六十六石七斗八升
 九合又夕年のそのし
 同年 年中 源の
 義經公の巾着袋
 糸井の女系帯の
 意利者



意利者

その後 岡之平 ちう二 天竺の 五才兵衛が 相傳して 八葉乃
 我ひよ 見一と 彦次 他九 小責 かの 至 大款の 申成ニッ子 別三の 小
 別九ッ 小責を ころて 通りまこ 引受して 掛とて 早割の手練よ
 多くの 款の 引とり けり 五才 兵衛の 九代 九代 況と 一ッ
 一進と 又すみ 我一子 帰一 倍七 弟一 けとる ひと 相傳して
 九と 八十一 葉の とき 目如く 性生と げと せとる
 美劫 責馬 麻粒と 名付 たる 権あり
 七の 内成ニッ 引とり たる 五倍 あり せとる

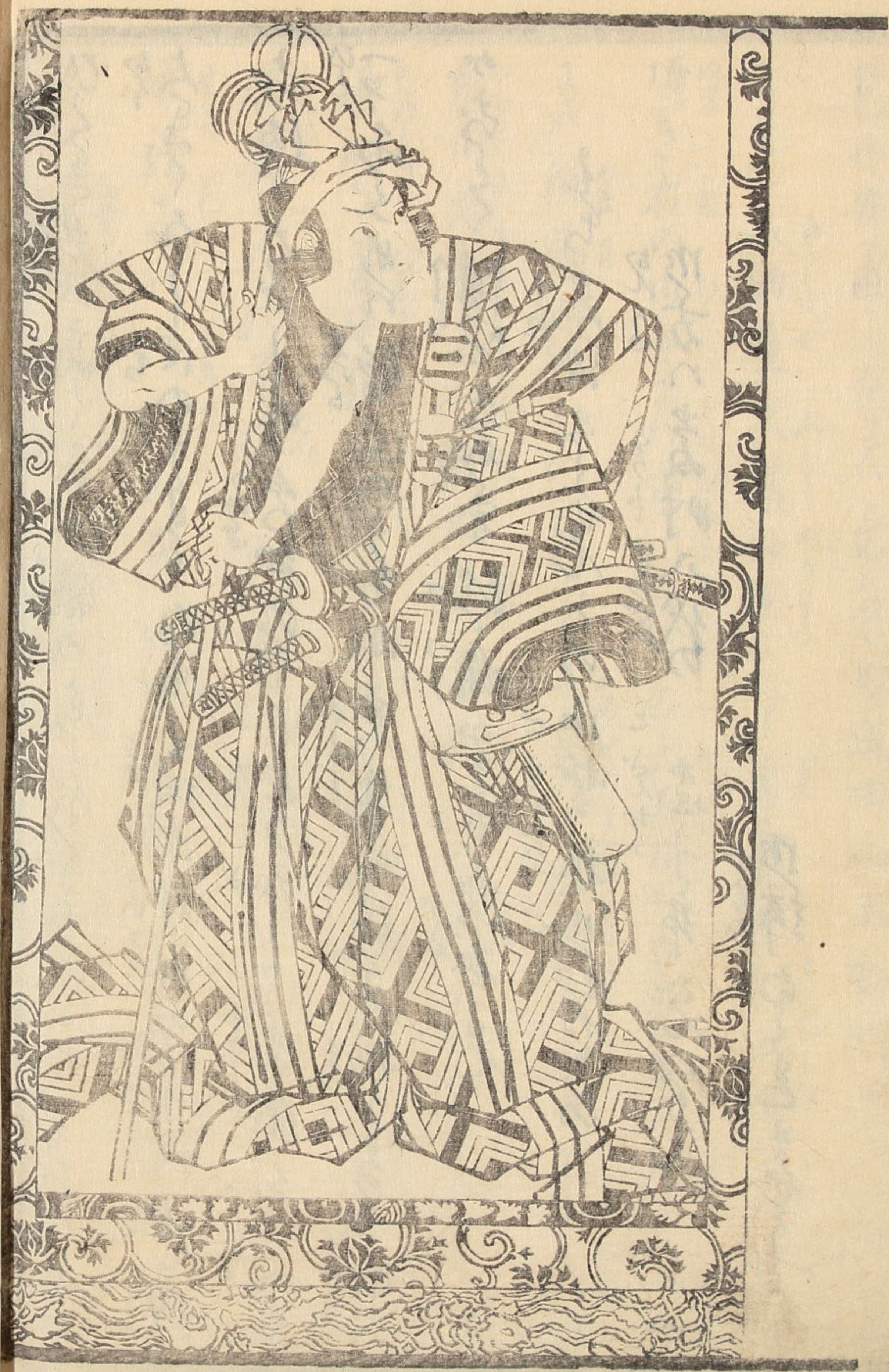
成田屋武道妙王



市川の 家 万治三 庚子 年
 相續して 今天保七 丙申 年
 能百七十七 年 小成

是小安藤一あんちなるなるも成田山不動明王なりたのやまふどうめいおうと一ひと筋すぢ分ぶん別べつ
りく成田屋武道妙王なりたのやぶどうめいおうと中なかままのりり別べつ以も頼たのみみのの髪かみをを
頂いただききき右みぎのの市いち子こまま市川いちがわ代しろ々々の大おほ太た刀やいばををももたたりりのの爪つめ
のの強つよ痛いたぬぬをを少すこのの法はふををそそ者もの一ひと方かた治ち之の庚かち子このの年とし元もと祖そ
市川いちがわ力ちから牛うし上のうへ人ひと輕かろのの昇あが平へい門かどのの際さへ一ひと筋すぢりり眼まなこもももも
其その財さいはは美み甲かにに不ふ動どうのの意いををとと頼たの煩わづら頼たの單たんのの口くち元もと細こくくもも
未ま廣ひろががりり此こゝ子こ孫そんととささげげ福ふく杜と丹に花はなのの最も貴たかいいとと世よのの
世よ活いきるるののハハ○まるねねぬぬ修しゆ勢せい沙さ志しののどどくく鼓こ永なが一ひと腰こしをを
ままでで長なが命いのち長なが寿しゆ子こ孫そん連れん綿わたとと相あ濟きをを一ひと筋すぢ入いれ鼻はなのの

ひくきひく者もののの高たかくるくる一ひと眼まなこのの者ものををくくくくももツつ小こららめめがが
ちちききくるくる一ひと口くちののままららぬぬもも小田おだ系けい外がい郎らうのの奇き特とくをを殘ざん
おおははぐぐちちぎぎ一ひと毛け出でひひむむどどりり出で一ひと柔な弱じやくあるある人ひともも
一ひとツつゆゆめめがが暫しばくくののううちち小こ恙や事ことのの法はふとと物ものととるる助すけ六む
かかぶぶくく頭かぶをを志しめめるる頭づつ痛いたかかもも樂がくををももてて
ままちち奏そう我われららととせせんんととのの由よし誓ちか頼たのむむののままのの
此こゝ方かたのの美み時とき八はち代だいのの 志し十じゆ弟ていととんんぶぶりりとと
此こゝ評ひやうわわくくととまませせりり

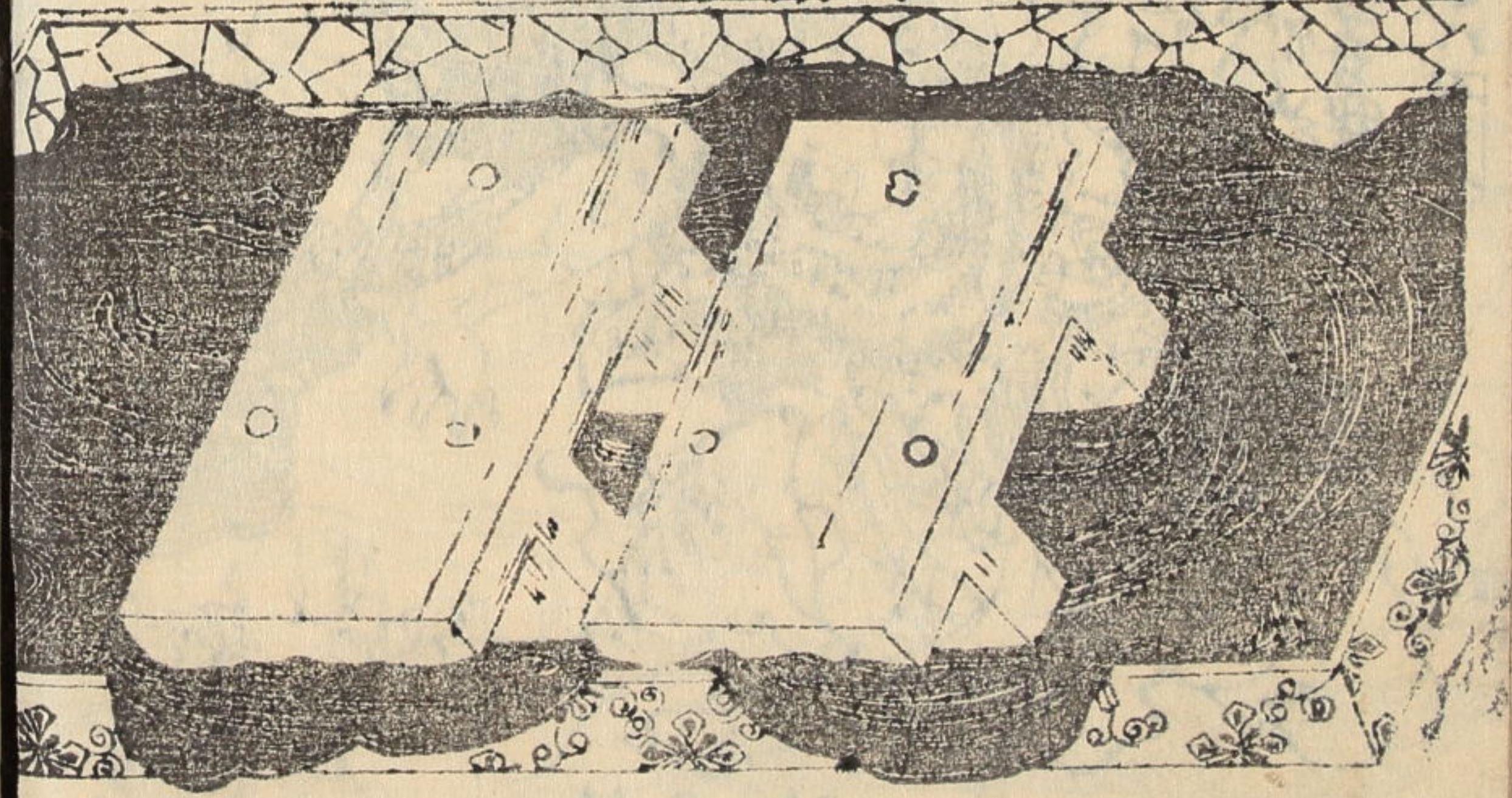


天そんるうひ手合の上使とまいて酒のゆびごちのり人のうこれゆりゆも
 りぐまをいをも鬼ちくの相かるけんその相傳ひをもゆりゆり大江山
 鬼の居接へ新出屋産子に定り四ッ切と岩屋の門へうけあんど
 をあへ上使のまのきろねたのこうあひひやうしれ肩を風きろをり
 うこせり南枝の梅が香や花の真つせ東風が場町ううふきこ屋町
 む年ぶりのをの房のたしをいさげと江島子に田を紋小あうす
 丑のう細もねへ小二オグごらのまであひふ日よりふきこ産子本
 屋の産がうらモレ鬼をいささんかんやまうあこのんやん

作者曰

此文向の廿二年切りのせりぬゆを定めて吉好の
 此方の田ぞんとあうんが再々ふ字を

是るる世の事も由千本れそのむう
 場念のたねたれ久人きくの故布又の相ま
 其の下の下たるのゆうて四月のま
 此の極むののしきとていふも後花の
 脚のくうさまう花のすけするは
 け下とをさ大門口のまきま
 脚のこまをんうきとまきまのま
 此の事後より同様のの面像す
 トのゆれはきくまきまのま子の
 是のまきまのえるまのけのあ
 と若のまきまのまきまのま
 ままきまのまきまのまきまのま



同より安房上様と一めま
 見えわたの眼力はさるさの
 此のまきまのまきまのま
 久きまのま
 らのまきまのま
 此のまきまのまきまのま
 又まきまのまきまのま
 ぐのまきまのまきまのま
 此のまきまのまきまのま



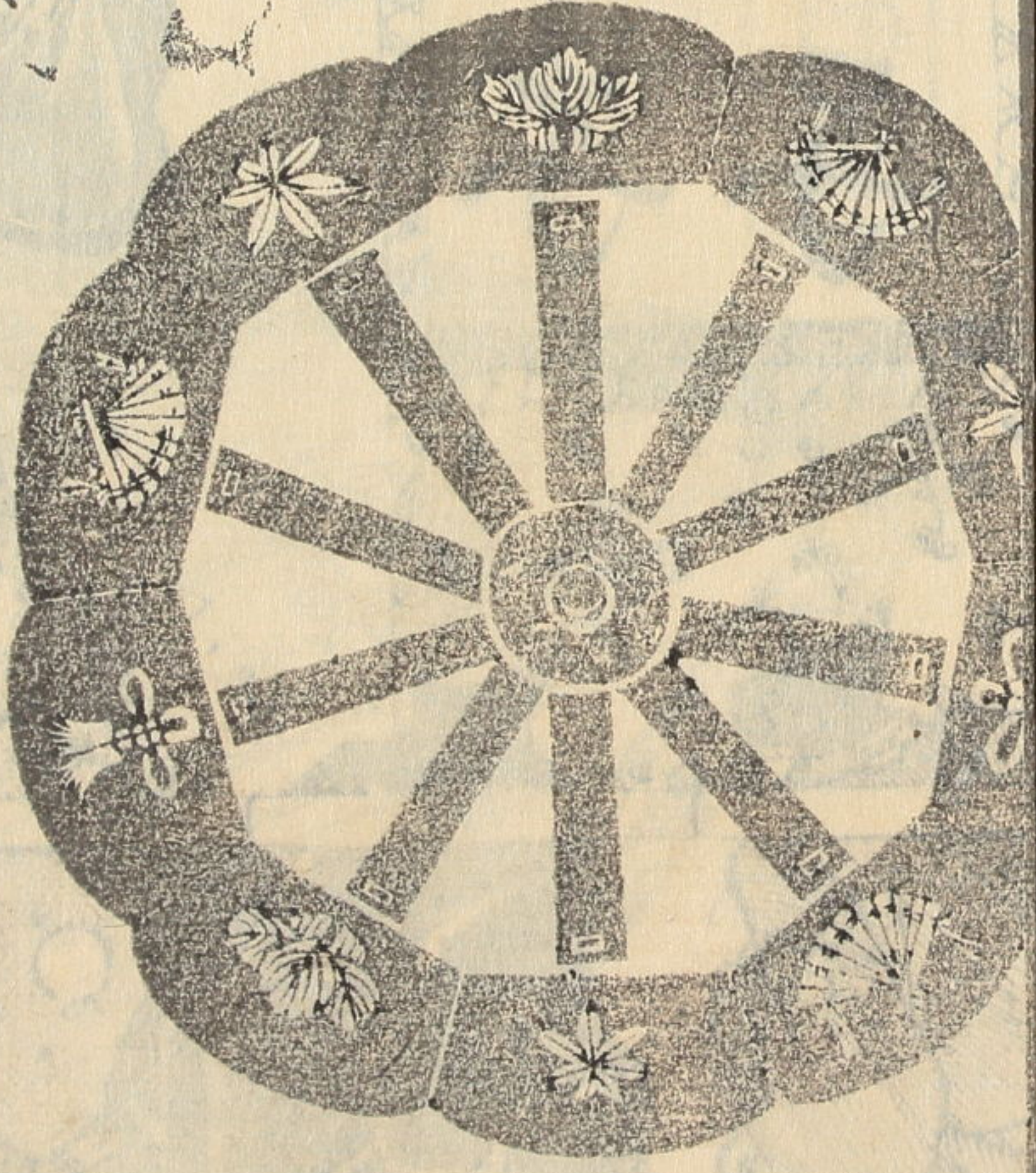
見物のゆれまきま

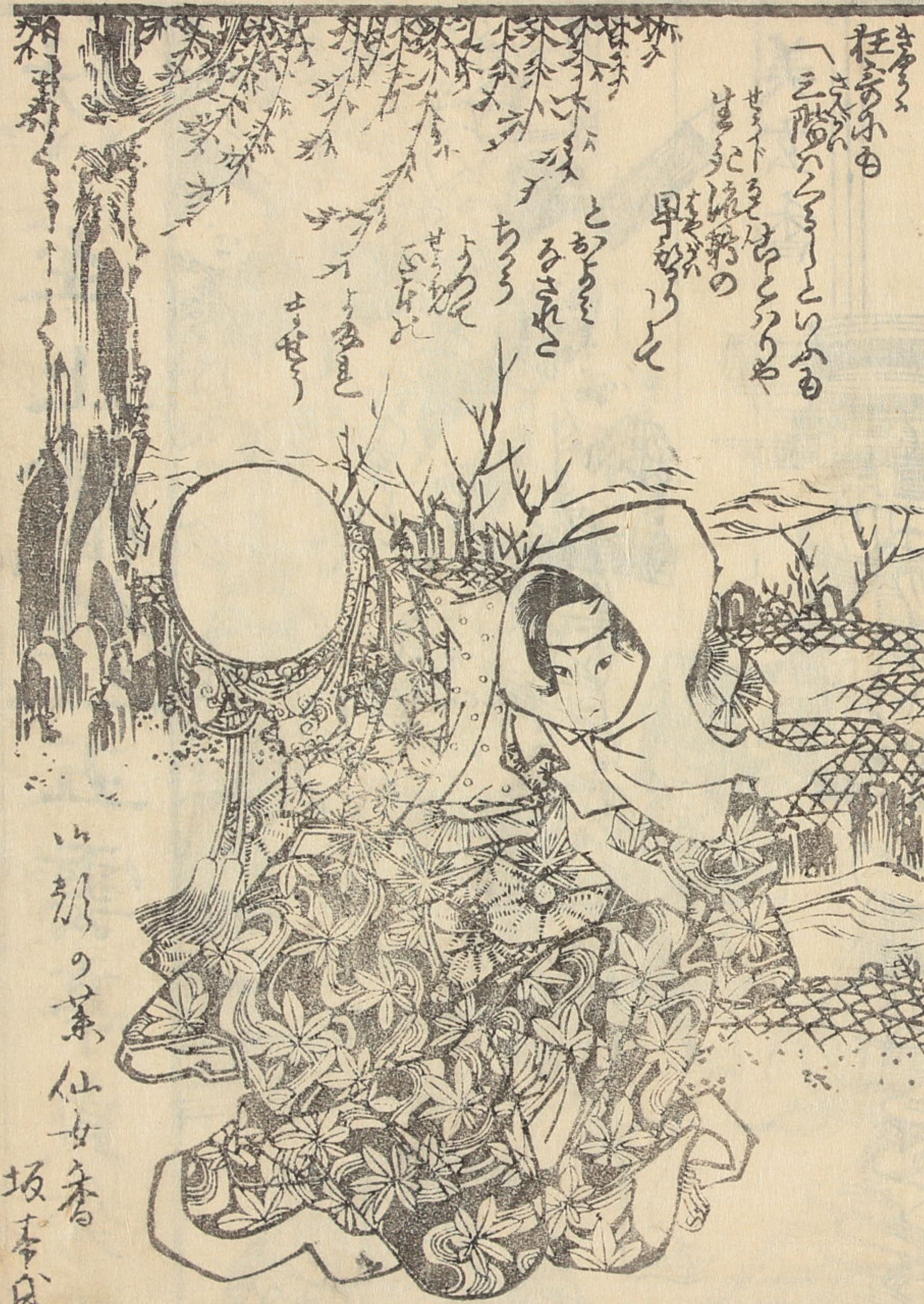
これるる車の輪まの
 そのむじ北郭まの
 大を山を舟の曲
 輪のなるとり入千山花
 妻のなるとり維を
 みよしの初葉小ひきま
 そのあひひんま
 其外美人の枕とわの
 客の夜毎のうらま
 早の枕の情もや又うら久深
 ひろの葉花車の考どろま
 まろと下より返してよめ別
 と旅ら此字の修字はるれ
 車も花ものがる申ちり



よのそ夫ゆつさまん
 まるる洋わ
 まるる

○此小樹なる一輪の
 先の式を三馬が戦作
 小舟のむらむらのゆき
 わる対なるむらま
 居るうらうらまの
 源も由平公ゆめく
 小舟のむらむらまの





狂言小町

三階のくまのこりあも

せうとまはつらつら

早稲

あつら

あつら

あつら

あつら

山梨の茶仙女香
坂本貞製



ふらふらけんりり

かろくくとおんあつら

ひのきり電光のどくま

今福ののちへ不彼の

健なつまこやそが久保の

名古名の大打張の焼

あつら

輪回の車の掃

甲斐守を再生

不破

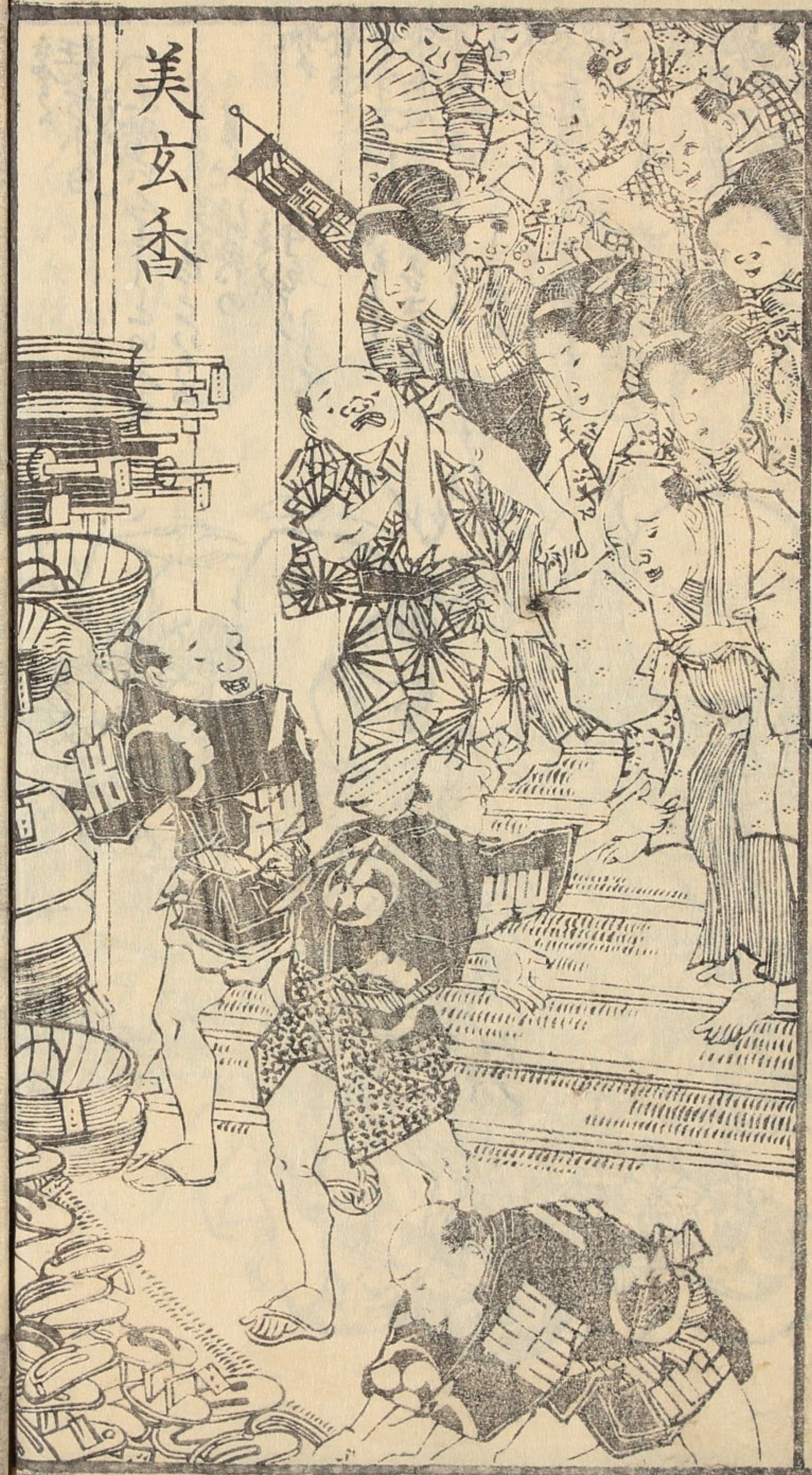
と名古名の車

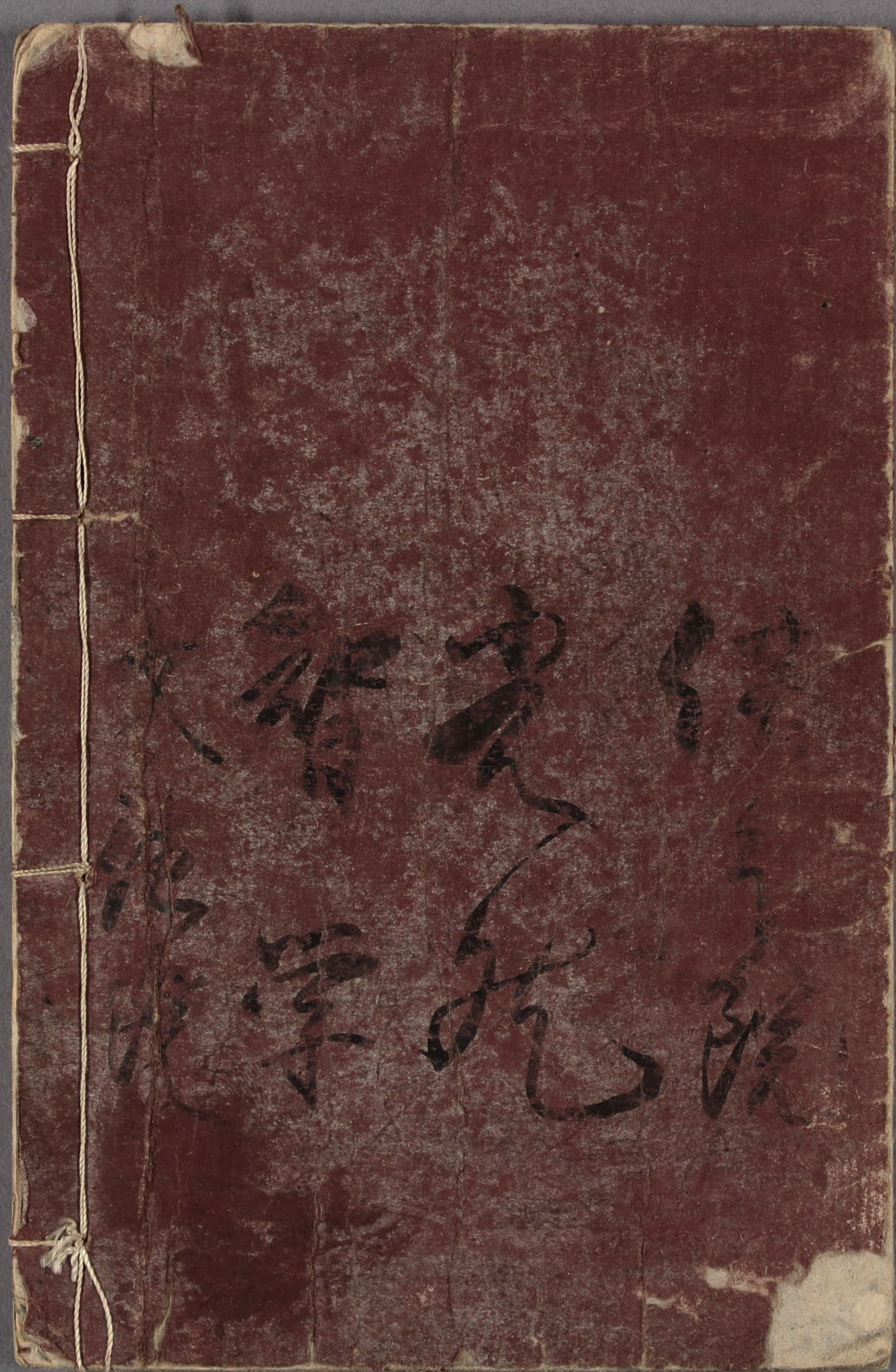
梨のまき天市川

代目白河白桂和清の

林至止藏作五雲亭貞秀画

美玄香





御覽
卷之九